

# 不思議の鍋

井 本 英 一

最近読んだ中丸薫『明治天皇の孫が語る 闇の世界とユダヤ』（文芸社、1998年）の中に中国の革命家孫文旧蔵の鍋のことがあった。その由来を記そう。

中丸女史の父君堀川辰吉郎は、故あって玄洋社を結成し大アジア主義を唱えた頭山満とうやまみつるのもとに少年時代から預けられ文武の教育を受けた。1895年10月広州における最初の挙兵に失敗し、日本、米国を経て96年10月ロンドンに到着した孫文は、翌年3月滞英中の南方熊楠と最初の出会いをしている。1898年孫文は再度の挙兵にも敗れて日本に亡命してきた。頭山満は孫文の強力な援護者の一人で、そのとき辰吉郎は19歳であった。孫文は頭山に対して辰吉郎を中国に同行することを懇請した。頭山は即座に同意した。中国では、孫文はどんな会議でも辰吉郎を自分の上座に据え、日本の皇子が援助に来たことを印象づけたという。革命は成功し、生死を共にした辰吉郎に対し孫文は感謝のしるしとして秘宝の鍋をもち帰らせたという（212-216頁）。

因みに南方熊楠は明治33年（1900）10月に帰国したが翌年2月孫文は熊楠に会うために和歌山に来訪歓談し有名な記念写真を残している。この年の10月に熊楠は那智に去った。多忙な孫文はその後も阪神地方に来たとき熊楠との面会を熱望したが三たび会う機会はついになかった（中瀬喜陽、長谷川興蔵編『南方熊楠アルバム』八坂書房、1990年、66-67頁、長谷川筆）。

孫文が堀川辰吉郎に贈った鍋はインドから将来したといわれるもので、直径50センチ高さ20センチくらいで淡い黄金色をしていた。この鍋の中に水を八分目くらい入れて把手を動かすと細かい震動が起こり、鍋の中の水が霧になって鍋の上20センチくらいまで立ち昇り始める。振動している水に手を入れるとピリッと電気にかかったようになるという。君主が家臣を各地に派遣するとき霧を見つめていると、家臣の顔と相応しい場所が映し出されるそうである。秦の始皇帝の母が大病を患ったとき、この鍋で試してみたところすっかり良くなったといわれる。この不思議な鍋はのちに神盤と名付けられ国宝とされたという（中丸、前掲書、209頁）。この鍋はその由来についてかなりの信憑性があるらしく、堀川辰吉郎その他の人々が見守る中、高松宮殿下が鍋の上に両手をかざしている写真が中丸、前掲書の口絵にある。同書には皇太后の兄久邇朝融王くにあさあきらが白い前掛けを着け鍋の両端に手を置いている写真もある。朝融王の隣りには堀川辰吉郎が威儀を正し、外国人を含めた数人の貴顕がこの人の後ろに立っている（212頁）。

この鍋は世界の多くの国で伝えられる無尽蔵の食物を出す鍋や釜を想起させる。マジックではある容器の中に花束などを出現させ、ギリシア神話でいう豊饒の角つの（コルヌ・コピア）をつくって見せることができるが、現実の世界では物理的にそのようなことはありえない。神話ではゼウスに授乳したというクレタ王の娘アマルテアに対しゼウスは山羊の角を与え、この角は所有者が欲するあらゆる食物を出すと保証した。美術では、角から花、果物、穀物がこぼれ落ちんばかりに顔をのぞかせている。マジックや空想の世界ではない現実の世界ではこのような現象は期待できないが、それに近い現象を見ることによって、伝承の世界に浸ることはできる。問題の鍋は、震動させると鍋の中の水が霧になって鍋の上20センチくらいまで立ち昇り始めるという。貴人みずから実験した記録が残っているのを見ると、不思議な鍋であることはまちがいない。

この鍋の同類は神戸の南京町（中華人街）でも見られる。南京町の東側入口を入った右手に中国物産スーパーマーケットがあるが、店頭には鍋が置いて

## 不思議の鍋

あり七割がた水が入っている。鍋は真鍮製で内側上辺には雷文がめぐらされ、底には龍が彫られてある。通行人は誰でも実験することができる。まず手を水に浸して口型に垂直に立った両側の把手の上辺をこすっているうちに、水面に小魚の鱗のようなさざ波が立ち始め、やがて無数の微細な水滴がピンピンと20センチほどの高さに飛び上がり、霧のような塊りができる。把手の外側をこすっても霧状になる。内側をこすっても同じく霧状になるが、内側に手を置くのは逆手になるので葬式のときの作法である。上辺や外側に手を置くのは順手であるので日常、慶事の作法である。鍋の中を区画して水を着色すれば、霧の塊りは鍋から溢れ出る色とりどりの食物に見える。店頭の鍋は並のものであるが、上等のものともなれば霧は壮観であろう。

ところで孫文旧蔵の鍋はインド起源であるという。インドの説話には当然のことながら、無尽蔵の食物を出す鍋釜の伝承がある。昔、坊さん夫婦が住んでいた。お客があるときは托鉢だけではとてもしのいでゆけなかった。夫の僧ははたらき口を探して旅に出た。途中、精霊たちに親切にしたので、彼らはかまどにかけると欲しい食べ物が何でも出る大鍋をくれた。坊さんは家に帰ることにし、昨日泊めてもらった商人の家にまた泊めてもらうことになった。坊さんは一部始終を商人に話した。その夜、商人は坊さんの鍋をそれとそっくりの鍋と取りかえ、つぎの日何くわぬ顔をして坊さんを見送った。

家に帰った坊さんは、妻の前で不思議な鍋を試したが鍋の中はからっぽだった。坊さんはあの商人の所に一晩泊って精霊たちに会いにいった。精霊たちは坊さんに宝石や真珠を糞の代わりに出す山羊をくれた。坊さんは帰りも商人の家に泊めてもらったが、商人は坊さんの山羊を別の山羊ととり代えておいた。家に帰った坊さんは妻の前で山羊を試したが、山羊は糞をするだけだった。

坊さんはまた精霊たちに会いにいった。精霊たちは、「悪者を縛れ、悪者を打て」と命令するとその通りにする縄と棍棒をくれた。帰途商人の家に泊まり請われるままに説明して呪文を唱えたところ、縄は商人を縛り棍棒は商人を打った。坊さんは商人から鍋と山羊をとり戻し妻と幸せに過ごした

(「ふしぎなおなべ」坂田貞二編訳『インドのむかし話』偕成社, 1989年)。

鍋は井戸の中から出てきた精霊にもらったもので、本来は異界のものであった。糞の代わりに宝石をひる山羊も異界のものである。異界とこの世は全てあべこべで、この世でからっぽの鍋はあの世では無尽蔵の食べ物を出し、この世で糞をひる山羊はあの世では宝石をひる。ギリシア神話の<sup>コルヌ・コピア</sup>豊饒の角は、山羊の角であったのは前述した通りである。山羊は聖性をもった動物で、ギリシアではディオニュソス神の化身であった。

ディオニュソスは後期にはバックスとしてブドウの神とされ、さらにはブドウ酒と酩酊の神格ともなった。ギリシア神話では、雄山羊がブドウ畑の中に入り込みブドウを食べたためにディオニュソスの怒りを買って、人々によってディオニュソスに犠牲として供えられた。いっぽう雄山羊は石に変えられ、ブドウ畑の中にその石像が立っていた。パウサニアス『ギリシア案内記』(下, 馬場恵二訳, 岩波文庫, 1992年)によると、ギリシアのコリント地方にあるフリウスの町の広場には雌山羊の青銅像が奉献されていた。山羊像には金(箔)がかぶせてあった。この地方の人は、山羊星という星が昇るとブドウの樹を駄目にしてしまうので、広場の山羊像を丁重に扱いその像を黄金で飾り立てる(72-73頁)。山羊像は殺される雄山羊の像と再生を祝われる雌山羊の像があったと考えられる。

ディオニュソスは山羊ばかりでなく、小鹿にも化身した。アポロドーロス『ギリシア神話』(高津春繁訳, 岩波文庫, 1953年)によると、ゼウスは妻のヘラに秘してセメレを愛し孕らせたが、ヘラの嫉妬によってセメレは命をおとした。六か月で流産した胎児をゼウスは大腿の中に縫い込み、月満ちて縫い目を解いてディオニュソスを生んだ。ゼウスはヘラの嫉妬を恐れ、ディオニュソスを小鹿に変えてヘルメスに渡した。ヘルメスはディオニュソスをニンフたちに育てさせた(125頁)。鹿も山羊も角のある動物である。小鹿の角はその成長力のため珍重された。いずれも豊饒の角として信仰の対象となった。

中世ケルトのアーサー王伝説では、聖杯がモチーフの一つになっている。

## 不思議の鍋

キリスト復活後50日目のペンテコステ、精霊降臨節の日、聖杯が出現した。灰の水曜日から四旬節が始まり、復活祭まで47日ある。ペンテコステは念を入れてこれを繰り返したものと思われる。飛鳥時代に行われた仏事の四十九日と神事の百日招魂祭に相当するものであり、中国の四十九日と百日喪に相当する。中国でいう4月5日前後の清明あるいは寒食節は、一年の交替する節目で、春分正月から2週間後の小正月でもあった。復活祭は移動祭日であるが、四月上旬が平均的である。小正月が本来の新年であったので、復活祭は再生の日であったと考えられる。

ペンテコステの伝統がアーサー王伝説にとり入れられた。アーサー王が騎士たちと共に大広間の食堂に座り食事を命じて待っていると、宮殿をゆるがすような雷鳴が鳴りひびき、白い錦に蔽われた聖杯が広間の大扉から入ってきた。聖杯は食卓のまわりをめぐるが、どの席も各人が望む食物で満たされた。食卓に食物が供されると聖杯はたちまち見えなくなり、誰もその行方を知らなかった（逸名氏『聖杯の探索』天沢退二郎訳、人文書院、1994年、33-34頁）。

聖杯（サン・グラアル、ホーリー・グレイル）とは何なのか。伝説ではイエスが最後の晩餐で用いた酒杯であるという。グレイルという語は（月の）クレイターと同じ系統に属しているので、底の浅いどんぶり状容器を想像させる。しかし伝説では食卓上のあらゆる食べ物を運ぶ大皿で酒器ではなかった。酒宴は酩酊によるこの世とあの世の境界上の愉悦であったので、ここに現れる聖杯はあの世のものである。異界の入口にあるとされた大鍋や酒を入れる角杯や食物を盛る大皿が聖杯の形成に関係したと考えられる（リチャード・キャヴェンディッシュ『アーサー王伝説』高市順一郎訳、晶文社、1983年、201-202頁。C. S. リトルトン、L. A. マルカー『アーサー王伝説の起源』辺見葉子、吉田瑞穂訳、青土社、1998年によると、アーサー王伝説はイラン系のスキタイ文化に由来するという）。

イエスはつき従ってきた群衆の中の病人を癒やした。やがて夕方となったが食べ物パン五つと魚二匹しかなかった。イエスは天を仰いで祈り、パン

を裂いて弟子に渡すと弟子はそのパンを群衆に与えた。群衆は満腹した。残ったパン屑を集めると十二の籠にいっぱいになった。食べた人は女と子供を別にして五千人の男がこれを食べた（「マタイ伝」14. 13-21, 「マルコ伝」6. 30-44, 「ルカ伝」9. 10-17, 「ヨハネ伝」6. 1-14参照）。

別の個所では、イエスはパン七つと少しばかりの魚を四千人の男に裂いて与えた。残ったパン屑を集めると七つの籠にいっぱいになった（「マタイ伝」15. 32-39, 「マルコ伝」8. 1-10）。

京都勧喜光寺の『一遍聖絵』によると、一遍上人と彼の弟子である時衆が美作みまさかの中山神社に参詣したとき、神官は一行を穢れた者として楼門を入ることを許さず、楼門の外におどりやを設けてそこに入れた。穢れた者とは流浪の民となった乞食（非人）のことで、一遍に救済を求めた集団のことである。しかし神官に一遍をもう一度呼べとの夢の告げがあったので、上人と時衆だけは拝殿に昇り、結縁者である土豪や農民に法を説いた。このとき「みごくのかま」（御御供の釜）がおびただしくほえ、この釜で粥を炊いて一遍に供養せよとの神意があった。楼門の外にいた非人は粥を施された（宗森英之「中山神社」谷川健一編『日本の神々』2, 白水社, 1984年, 98-99頁）。聖人としてのイエスと一遍の行動には共通した面が見られるのは興味深い。中山神社の釜は後述する吉備津神社の鳴り釜と同じものであるが、中山神社の釜の方が無尽蔵の食物を出す釜としての特徴をよく伝えている。

魚の調理についてであるが、焼き魚はパンと同じように皿に載せて配ったであろう。魚を香草やオリーブ油で煮る場合は鍋釜を必要としたことはいうまでもない。鍋からは無尽蔵の魚が出たということである。魚を鍋で煮る習慣は狩猟時代に野獣の肉を煮た習慣と同じくらい、あるいはそれより古いと考えられる。イランでは新年に際し<sup>エス</sup>Sで始まる七種の食べ物を用意するほか、乾した（淡水）魚を用意する。新年の食事は始原の食事といわれるもので、乾し魚はイラン人がイラン高原に南下してくる以前にいた南ロシアの食物の名残である。遊牧が成立するまでは、移動するときには蛋白源として乾燥魚をたずさえたのであろう。

## 不思議の鍋

日本では正月7日に七種<sup>ななくさ</sup>粥をいただく。春の七草を主体にした粥と小正月の七種の穀物を主体にした粥がある。いずれの粥も正月前半部の死の儀礼が終わって後半部の再生の儀礼に移ったときとその終了日である小正月にいただく。これらの粥は、元旦あるいは2日にいただく<sup>ぞうに</sup>雑煮と同じような始原の食事である。雑煮には、心臓あるいは四角い他の臓器を表わすという餅のほか野菜と肉が入っているので、始原の食事であったことがよく分かる。七種粥や雑煮の起源は歴史時代であることは勿論であるが、発生的には始原の食事であった。日本の正月でもこのほかに、ゴマメや棒ダラのような乾し魚が用いられる。

こちらはいずれも海の魚である。海上を移動して先祖が日本列島に到着したとき、わざわざ海産魚を乾燥する必要はなかった。先祖が内陸アジアを移動していたときの淡水魚が海の魚にとって代わったのであろう。

イエスが群衆に与えた無尽蔵のパンと魚の話は、流通と保存の技術が発達していなかった時代の人々の願望を表わしたものであった。魚は長寿・永生・不死の願望の表象でもあった。アレクサンダー大王伝説によると、アレクサンダーは生命の水を飲んで不死を手に入れることを願う。地下の水脈から現れた緑の人ヒズルの案内で大王は地下水脈をその源泉まで進んでゆく。途中水脈は二つに分かれ、大王とヒズルは別々の道をとる。大王が到着した泉は死の水の泉であった。大王は生命の水と思い込みその水を飲み身体に浴びる。ヒズルは生命の水の泉に達した。携帯した乾し魚を水でふやかして食べようとしたところ、乾し魚は生命をとり戻して水中に逃げていった。魚は生命の更新、不死と関わりをもっていた。

キリスト教時代あるいはそれ以前に、洞穴の奥壁に魚が描かれている場合がある。イクテュースという大文字が描かれているものもある。アレクサンダー大王伝説のヒズルの魚と同系統のものと考えられる。地脈の最奥部にありと信じられた不死の生命が魚で表象されたのである。ギリシア語で魚のことをイクテュースというが、その一文字一文字は順にイエス・キリスト・神の・子・救世主の頭文字を表わす。キリスト教にとっては、偶然が神の摂理

によって真実の証となった。ギリシア語イクテュースの同系語はアルメニア語とリトワニア語に残っている。おなじみのゲルマン系、ラテン系の魚を表わす語とは別系統の古語であるが、エーゲ海やバルト海の魚ではなく、故地の淡水魚を指した語であったと推量することができる。

紀元前10世紀のイスラエルのソロモン王の神殿については、くわしい記述が『旧約聖書』の「列王記」上に残っている。神殿の前には広い前庭があり、そこに青銅製の海と呼ばれるものがあつた。海は径10アンマ（10キュビット、4.5メートル）、周囲は30アンマ（13.5メートル）あつた。海は12頭の牛の像の上に据えてあつた。牛は東西南北に3頭ずつ分かれて海を背負って立っていた。その縁は百合の花をかたどって杯の縁のようにつくられていた。厚さは1トファ（7.5センチ）あつた。その容量は2000バト（4万6000リットル）あつた（6.1-7.40）。海の位置は東京の浅草寺の本堂の前に安置された青銅製の香炉と同じ位置にあつた。海は四脚のかなえで、海の下で火を焚き神への供物を調理した大釜であつたと考えられる。供物を調理して神に捧げたあと参加者は無尽蔵の食物を神人共食した。日本の寺院の香炉の場合、火の記憶が食物調理から焚香へと移転した。日本仏教では寺院建築の構造上の形式を伝承しても、鎌倉時代以後は肉や魚を調理することはありえなかつた。

根津鎮衛『耳袋』巻二「吉比津宮釜鳴りの事」にいう。長崎奉行であつた桑原豫州は江戸・長崎を往来のとき吉比津宮を参詣した。社内には径四尺余りの釜がかまどに据えてあつた。人々の語るところによると、神供を奉獻すると神人が米一合ほどを釜の中に入れ塩水で清め、松葉を釜の下で焚く。最初は鈴の音ほどの鳴り音であるが段々と高くなり、あたりにも響いて鳴りわたる。やがて神人が塩水をかけると鳴り音も止む、ということであつた（鈴木棠三編注、1、平凡社、1972年、82-83頁）。アーサー王伝説の聖杯が轟音をともなって出現するのを想起させる。

江戸時代初期の儒学者林羅山は『本朝神社考』の中で吉備津宮の釜について記述している。参詣人があるたびに巫人は湯をたぎらせその中に竹の枝を浸して身にふりかけて潔斎する。参詣人は神意を伺うため釜の前に供物の米



## 不思議の鍋

を盛る。祈りを終えたあと釜の下で柴を燃やす。そのとき釜が牛声のような音をだして鳴れば吉、もし釜が鳴らなければ凶という（巻三）。ソロモンの神殿にあった海と称された青銅の釜は、東西南北にそれぞれ三匹の牛が配されていた。獅子の背に載らないで牛の背に載るのは、牛のもつ生殖力や牛肉の豊饒性のためであったと思われる。殷時代の<sup>かなえ</sup>鼎のジャンルに牛鼎がある。この鼎は四脚で本体の側面に牛の頭が描かれている。イスラエルの場合もそうであるが、牛は異教時代の祖先獣であり神であったと考えられ、それを調理して神に供え多くの子孫が共食する習慣があったのであろう。孫文旧蔵の鍋やその同類は把手を擦っているうちにポー・ポーという唸り声を発し、共鳴して牛（蛙）の鳴き声に近づく。

吉備津神社の本殿から延びる長い回廊の途中に釜殿があり、現在に至るまで吉備津の釜は伝えられている。上田秋成『雨月物語』巻三に「吉備津の釜」の話が収められている。吉備国<sup>にわせ</sup>庭妹に井沢庄太夫という者がいた。祖父は播磨の赤松氏に仕えたが嘉吉の乱でこの地に来て、三代を経て農を生業として豊かに暮らしていた。一子正太郎のために仲人が吉備津神社の神官<sup>かさだみき</sup>香央造酒の娘<sup>いそら</sup>磯良との婚約をとりつけ、結納を送り婚儀をもよおした。

さらに幸せを神に祈ろうということで、<sup>かななぎほうり</sup>巫子祝部を集めて吉凶を占わせた。吉祥には釜は牛が吼えるような音を出す、凶祥には何の音も出ない。この婚儀に関しては虫の声ばかりの音もなかった。香央夫妻は巫子らが十分に身を潔めなかったためと考えた。すでに赤い縄で結ばれたかぎり否むわけにもゆかないのでそのままにした。

しかし正太郎は遊女<sup>そで</sup>袖と駆落ちし、磯良は死病の床につく。磯良の怨念は袖をとり殺し、ついで死霊となって正太郎を襲う。四十二日の物忌みの満願の日、うっかり未明に戸を開けたため正太郎も悲鳴をあげて消え去る。『耳袋』では吉備津の釜には塩水で清めた米を入れたり塩水をかけるが、『本朝神社考』や『雨月物語』には塩水のことはない。ソロモン神殿の青銅の釜は海といわれたが、その巨大な口径のためか中に海水を満たしたためのいずれかであろう。後述する塩釜も海水と関係がある。

吉備津神社には百済から飛来してきた温羅<sup>うら</sup>と吉備津彦命の合戦の伝説がある。温羅は左の眼に矢を受け雉に変身して逃げた。命は鷹に変身してこれを追った。二者はさまざまな生物に変身して闘争するが温羅はとうとう首を刎ねられ、その首は吉備津神社の釜殿の下に埋められた。首は温羅の妻の阿曾姫に命じて祭らせた（『谷川健一著作集』第五卷，三一書房，1985年，345頁。伊藤清司「民間説話と儀礼」I，関敬吾博士米寿記念論文集『民間説話の研究』同朋舎，1987年，123頁）。温羅が片目になったことは、鋳物師，鍛冶師の神を想起させ、首をかまどの下に埋めるのは鍛冶場に安置する死体を想起させる（前掲二書）。釜の伝承にはその製作者が背後にあったことは重要である。

滋賀県野洲郡<sup>やす</sup>の三上山はむかで山とも呼ばれた神体山で近江富士ともいわれる。伝説では、昔この三上山を七巻き半まとして住みついた百足<sup>むかで</sup>がいた。勢田<sup>からし</sup>の唐橋の下に住む龍神を殺そうとしたので俵藤太<sup>ひでさと</sup>秀郷がたつた二矢<sup>ふたや</sup>でこの百足を殺した。龍神から米俵一つ，絹布一匹，釜一つ，鐘<sup>つりがね</sup>一つを褒賞としてもらった。俵は無尽蔵の米を出し，絹布はいくら断ち切ってもなくならなかった。釜は物を入れると薪なしに調理した。鐘は三井寺に奉り今に伝わっている（浅井了意『東海道名所記』2，平凡社，1979年，101頁）。龍神が秀郷に与えた品目は出典によって異同がある（南方熊楠「田原藤太竜宮入りの譚」『南方熊楠全集』1，平凡社，1971年，89頁）。百足は鉾脈を象徴する虫で，鉾山関係者や鍛冶師に信仰された神であるという学説がある。

それに従えば，鍛冶師らは龍宮から无尽蔵の宝を手に入れたことになり，その中に无尽蔵の食物を出す鍋があった。この種の鍋釜はあの世のものであるという認識があった。

ウェイルズの伝説上の英雄ブランはもともとケルトの神であった。ブランは巨人で，どんな家も彼を収容できなかった。彼は死人を生き返らせる魔法の大釜をもっていた。彼は美しい妹ブランウェンをつけてこの大釜をアイルランド王に与えたが，王と不和となりアイルランドに攻め入った。このとき魔法の大釜はこなごなに壊されてしまった。ブランの首は部下によって刎ね

## 不思議の鍋

られウェイルズに帰った。ブランは生命を蘇らせる大釜をもっていったがそれは今はなく、生きていたときは脚に傷を受けて去勢されたが、その首は生きつづけ異界の酒宴を催す主人となり、宴につらなれた部下たちはこの世のものと思われない食べ物や飲み物をどっさり与えられた（キャヴェンディッシュ、前掲書、221-222頁）。

ケルトの英雄神ブランの話の中には、吉備津の釜と片目を傷つけられた温羅の首と俵藤太が龍神からもらった無尽蔵に米や食物を出す俵や釜の話が重なっている。鍋釜は不思議現象が見られるものはあの世のものであると認識された。あの世は境界で表象されたのでこの種の鍋釜は境界に安置された。アーサー王の騎士たちは大釜を奪うために異界を襲った。異界は地上の聖所のことであった（キャヴェンディッシュ、前掲書、202頁）。

明治10年（1877）6月18日、E. S. モースは日本を訪れ、すぐに江ノ島に実験所をつくり漁村に滞在して研究を開始した。8月14日、子供たちがみな派手な色の着物を着ている。彼は何か祭礼があると思った。実験所に行くと、小使いが自分の子供の頭を剃っていた。祭礼は彼らの先祖を祭るものだと教えられた。子供は少量の米をもってゆき、以前は海岸に置いた大釜で煮たものだが今は家の中で煮る。子供たちは塗り椀をもって自分の分け前をもらうために列をなして待つ。ご飯にはお祭りなので赤い豆が入っていて赤い色がついている（『日本その日その日』1、石川欣一訳、平凡社、1970年、177-178頁）。

明治6年の改暦による月おくれの盆のことをいっているが、明治の初年ごろまでは盆釜は境界である海岸に設置されたことが分かる。各人が少量の米をもち寄って赤飯を炊いてもらいかつては海岸で祖先と共食したことがよく描かれている。西角井正慶編『年中行事辞典』（東京堂、1958年）によれば、盆釜を据えるかまどを築く場所は地方によって異同があるが、海岸のほか、川原、路傍、家の前などさまざまである。日付も大体14日が多く15日という例もある。盆がまは多くの地域で成女式の名残と見られる行事である。女子が門口にかまどを築き一人前になるのが古い習俗であろう。

炉やかまどは入口にあるのが古い形式であった。葬儀や婚儀の際、入口で火を焚いたり盆の迎え火、送り火を入口で焚くのは、儀式に際して先祖がえりをしているのである。入口の敷居の下に小児を埋葬する風は近い時代まであった。毎日入口の敷居を跨いで通る母親の胎内に小児の靈魂が入り、生まれ変わって家の一員になることが望まれた。(入口にあった) 炉の火の中から男根石が出現する話が『プルターク英雄伝』の「ロムルス伝」の始めにある。中世にイスラム文化が栄えたスペイン南部にはイスラム建築がたくさん残っており、一部はイスラム撤退後、キリスト教教会堂や王宮に転用されたが、入口や窓枠に男根形の輪郭が見られる。古い文化がもった入口の豊穡性を表わすものである。

吉備津神社に伝わる温羅は片目の鍛冶神で、その首はかまどの下に埋められた。神の再生を祈願する行事であったと考えられる。入口の敷居の場所に炉があり、炉には釜が据えられ、炉の下には死体あるいは首が埋められた。釜の中に死体を入れると死者は再生した。入口には別に男根表象があり、死者の靈魂はそれを通じて母胎に入った。

ある男が都に年貢米を納めて甲賀の山里に帰る途中、日が暮れたので大木の下で野宿した。真夜中過ぎわが在所である由良の里の方角から光る物が飛んできて大木の枝に止まった。光る物は大木の根の下の声と話し合い、由良の里で同時に2軒でお産があり、男の子は「箕をつくってかど門々を売り回るべし」と書いた文字を左右の手のひらに握って生まれ、女の子は「つくらずして万福きたる」という文字を左右の手に握って生まれたと語った。

年月がたち二人は成人して夫婦となった。二人は大金持ちになった。男はやがて女遊びに狂い、家運が傾き妻に離縁状をつきつけて追い出してしまった。妻は伊勢国の伯母をたよって山里を出発したが、途中にわか雨にあいある金持ちの家の軒下で雨宿りをした。縁あってその家の主人である男やもめと結婚し家は栄えた。

いっぽう、はじめの男は女も去り下人も去って貧乏になったので箕を売って歩いた。他国にまで出かけ昔の自分の妻の家とはつゆ知らず、箕を買って

## 不思議の鍋

下さいと中に入っていった。昔の妻は男がかつての自分の夫であることに気付き、下女に錢五百文と酒と飯などを出させて帰した。これに味をしめ男はまた箕を売りに訪れたが、女が昔の女房であることに気付きその場で死んでしまった。女は下男に命じて男のなきがらを釜屋のうしろに埋めさせ、釜神として毎朝お供えして拝礼した（「釜神の事」『神道集』喜志正造訳、平凡社、1967年、159-164頁）。

訳注にもあるように、この話は産神問答と炭焼長者譚の合わさったものである。ここでもかまどのうしろに埋葬された死体は釜神として供養される。死者は神として再生するのである。釜から無尽蔵の福や吉を手に入れるのは妻の方で、同時に生まれた夫は二元論的な対偶では死であり凶を手に入れる。釜は吉と凶の二つから成っているので産神問答譚がうまくとり入れられた観がある。箕のモチーフが用いられているが、箕は異界の無尽蔵のたまものを載せるもので、妻は釜からも箕からも福を手に入れるのである。箕の上のキリストといって箕の上に載せた幼児イエスを崇拜する習慣がある。他の文化にも誕生したばかりの嬰兒を箕に載せて歩きまわる習俗がある。嬰兒は母胎から出現する穀霊と見なされたがそれは無尽蔵の子孫を生む源泉であった。

ヘロドトスはその『歴史』の中で次のようにいう。スキュティアのポリュステネス川（ドニェプル川）とヒュパニス川（ドニェストル川）の中間にエクサンパイオスという土地がある。この土地に青銅製の甕があり、その大きさはプラタイアイ戦でのスパルタ王パウサニアスがペルシア戦勝利を記念して奉献し黒海の入口に置かれた混酒器の6倍はある。この甕はスキュティア王が人民一人一人に鋏を提出させ、それを熔かしてつくったという（4. 81）。スキュティア人がいちばん崇拜したのはかまどの神であった（4. 59）。ヒュパニス川の下流の水は塩分が多くて飲用に適さない。ポリュステス川はナイル川に次ぐ資源に富む川で、魚類も豊富で飲用に適する。川岸一帯は穀物栽培にも適する（4. 52-53）。

黒海入口に安置された青銅の混酒器も、淡水と鹹水の川の境界に置かれた青銅の甕もいずれも青銅の釜と同じものであった。荒涼とした平原に青銅の

甕だけが残存するのは無気味なものであるが、生と死を分かつ境界の表象であった。このような巨大な青銅の容器はソロモンの神殿の前にあった青銅の海や日本の寺院の本堂の前に安置する線香を立てる香炉や本堂の大屋根の天水を受ける巨大な青銅の容器と通底するものである。長野善光寺本堂正面に安置された香炉は蓋付きの青銅混酒器で獅子の三脚に乗っている。エーゲ海文明の横穴式の墓室の入口に巨大な釜が安置してあるのを見る。釜は墓に葬られた死者との最後の共食、食い別れのためのものであったのか、死者のための無尽蔵の食物を盛ったものなのか、あるいは古代の生命の糧であった塩が盛ってあったのかいろいろ推測できる。

墓室の入口の釜はそこが大昔の調理場で炉やかまどがあったことを示している。19世紀の初頭の朝鮮には入口に調理場があった。入口にかまどや井戸や調理場がある文化は世界中にあった。英人ベイジル・ホール(1788-1844)は1816年ライラ号艦長としてもう一隻の軍艦アルセスト号と共に朝鮮西海岸と沖縄本島を探検航海した。彼らは朝鮮のある村に上陸したが、住民はみな働きに出ておりもぬけのからであった。一軒の家の入口の垣根を入ると、庭には穀物や藁を積み上げた山がいくつかあり木の臼や水や米の入った容器があった。このほかにきちんと巻いた釣糸を収めた籠なども置いてあった。

入口の左手には深さ50センチの大きな金属性の釜が二つ、床上30センチあまりの煉瓦づくりのかまどの中に据えてあった。焚き口は二つの釜の中間にあった。かまどの反対側にとりつけられた棚には椀やたらいや炊事用具が置いてあった。大部分は粗末な石製品であるが一種の鐘銅ベル・メタル(銅と錫の合金)でできたものも二、三見られた。食器の皿や椀の数から見積るならば、この家の住人は相当な数にのぼるものと思われた(『朝鮮・琉球航海記』春日徹訳、岩波文庫、1986年、75-76頁。バジル・ホール『大琉球島航海探検記』須藤利一訳、第一書房、1982〈1940〉には金閔丈夫他の解説があるが朝鮮の部分は訳出されていない)。ここにはもっとも古い形式である一つのかまどと二つの鍋が見られる。実用的見地からすれば両方の鍋は片方は飯を片方は副食の煮物をつくるのが一般である。しかしより古くは釜や鍋は吉と凶を表

## 不思議の鍋

象する二元論的構造の上に成り立っていた。一つの鍋釜で吉凶を表象することもあるし、二つの鍋釜で表象する場合もある。恐らく朝鮮の場合も入口の敷居の下に死体を埋めた時代があったにちがいない。現在でも葬儀において出棺する際、入口の敷居の上にヒョウタンを置き、その上に三度棺を落とす習慣がある。母胎と同一視されたヒョウタンを割ることによって中から靈魂を呼び出し棺の中にいる死者に移すのである。靈魂は死者本人のものであるのか、敷居の下にいる先祖（たち）のものであるのかいずれかである。敷居を通る死者が再生するわけであるが傍には釜や鍋があった。死者の再生にはヒョウタンや鍋が必要であった。ヒョウタンは有機物であるので消滅するが鍋釜は残った。

アイヌ民族は古い習慣を伝えていると考えられる。彼らの墓からは鉄鍋が出てくる。鉄鍋自体新しい文化であるが、鍋の伝統を保持している。藤本英夫『アイヌの墓』（日経新書、1964年）によると、アイヌの死者は埋葬されたとき足のあたりに鍋を伏せて置いたり頭の方に伏せて置いたりする。その場合鍋の底を欠いて穴をあけてあったり穴をあけてなかったりする。著者に対してこのような鍋を見た人類学者は、ちょっと珍しい習慣だと話したという（46, 84, 91-92, 96頁）。アイヌがこの鍋は何のためのものかについて意見をもっていることは明白であるが前掲書には伝えられていない。墓に副葬する容器の底を欠くのは多くの文化で見られる事実である。この世とあの世は全てがあべこべなので、死者はこの世とは逆に底から飲食物をとるからである。鍋は死者をその中に入れて再生させることができたであろう。鍋は死者のために無尽蔵の飲食物を提供したであろう。

二十四孝の一人後漢の郭巨は家が貧しく母が食事を三歳になったわが子のために減らすのを見て耐えられず、口減らしのためにわが子を埋めようと思ひ穴を掘ったところ、土中から黄金の釜が出てきた。その釜には不思議の文字が刻してあり、天が孝子郭巨に賜うものは（官も）奪うことはできず、民も取ることはできないと読めた。郭巨は子を埋めず釜をもって家に帰り老母に孝養をつくした（『御伽草子』郭巨、日本古典文学大系、岩波書店、255-

256頁、岩波文庫にもある)。この伝説は埋葬時に副葬品として鍋釜を入れる習慣があったことを物語っている。黄金の釜は官も民も奪取することができず、ただ孝子郭巨に天が賜わったものなのでそれを売って食べ物を手に入れたのではなく、その釜が無尽蔵の食べ物を出したのであろう。

トルコの首都アンカラにあるアナトリア諸文明博物館の所蔵になる前750—前700年頃のウラルトゥ文明に属する青銅の釜は一枚の青銅板をたたいてつくったもので、高さ51センチ、径72センチあり、三脚は高さ66センチ、脚部は幅58センチある。この釜はアルティン・テペの墓室の入口に安置してあった。釜の上辺には四等分された個所に牛の首が付いていて把手の役をはたしている。脚部は青銅の細い棒であるが、最下部は牛の蹄にかたどってある(『古代西アジア美術』大系 世界の美術2, 学研, 1975年, 第3章126図)。この青銅の釜は牛と一体となっている点でソロモンの神殿の海や古代中国の牛鼎と同じである。牛鼎は四脚であるが、トルコのかなえは中国の一般のかなえと同じように三脚である。

釜の上辺にある牛の首は把手の役をはたすが、そのような実用的なものあるいは装飾でもなかったと思う。釜の大きさからすれば牛の首一個を入れることができる。中国の牛鼎も牛の首を煮たものであろう。現在の中近東は羊料理を主とするが、食肉をとったあとの羊の首と脚は大釜に入れてスープにする。スープはエジプト豆などといっしょに煮てアルミの壺に入れ木の棒でよく突いてからパンと共に食べる。大釜の中には羊の頭蓋骨や脚の骨が残る。トルコのオスマン帝国の親衛軍イエニチェリ(新軍)はヨーロッパの属州から集めたキリスト教徒の子弟で編成され、14—16世紀の帝国の拡張に武功をたてた。彼らは気に入くないことがあると大釜をひっくり返すという独特の賄い征伐をした。それは料理人に対して行うというよりは、帝国のかまどに対していやがらせをした。

浅井了意『東海道名所記』(朝倉治彦校注, 平凡社, 1979年)にいう。駿河の沼津に入ると、駿河新宿のさきに右大将源頼朝が建久4年4月富士の牧狩りを行ったときの釜が畠の中にある。山王の社の境内にも釜がある(注で



## 不思議の鍋

はこの釜が頼朝の牧狩りの釜だという)。左の方に釜が淵という場所がある。昔盗人が釜を盗んだが重すぎたので淵に投げ込んだためこの名がある(131, 135頁)。17世紀後半ケンペルはオランダ人カピタンの一行に同道して江戸に参府旅行をした。そのときの日記『江戸参府旅行日記』(斎藤信訳, 平凡社, 1977年)にいう。一行が沼津に着いたとき、彼らの従者たちは釜の宮あるいは山王宮とも呼ばれる社を訪れた。将軍頼朝と義経が牧狩りに使った大釜を見物するため、その釜が宝物として展示されていた。それは置二枚以上もあって、牧狩りで捕えた猪をそれで煮たということだった。盗人がこの釜を盗んだが余りに重いので川に投げ込んだ。そのためここを釜ヶ淵と呼ぶようになったという(159-160頁)。

この釜が富士の牧狩りに使った大釜であったのかどうかは明らかでないが、巨大な釜であったので牧狩りに参加した者ら全体に食事を賄うことができた。あるいはこの釜は富士の牧狩り以前からある種の祭祀空間に安置されてきたのが、頼朝の牧狩りに仮託されたとも考えられる。裾野で行われた狩りは祖先獣を殺して食べ祖先にもそれを供えるためのものであったので、大釜は自然と聖性のあるものと見なされるようになった。ここでも、猪や鹿の毛皮や食肉や筋をとったあと、頭や脚は釜の中で煮込んでスープにしたであろう。

ヘロドトスはその『歴史』の中で、古代ペルシア帝国建国の祖キュロス二世の誕生に関する伝説を語っている。ペルシア帝国の前には同じイラン系のメディア人が建てたメディア王国があった。メディア王アステュアゲス王にはマンダネという娘がいたが、王は不吉な夢を見たので当時社会的地位の低かったペルシア人に娘を嫁がせた。王はさらに不吉な夢を見たので妊娠中の娘を実家に呼び寄せた。夢占いが娘マンダネが生む子が王に代わって王になるだろうと告げたからである。いよいよ赤ん坊が生まれると王は腹心のハルパゴスと呼んで、嬰兒を家に連れて帰り殺して葬るように命じた。ハルパゴスは嬰兒キュロスに殺すにしのびず、王から用意された屍衣を着せたまま王の牛飼いのもとに処置を頼むために連れていった。牛飼いいミトラダテスの妻スパコ(メディア語で犬の意)は、時を同じくして出産したが死産だった。

そこで子供をすり替えスパコの生んだ死児に屍衣を着せて葬りキュロスをつ婦に与えて養育させた。

牛飼いの子として育てられたキュロスは頭角を表わすようになり、アステュアゲス王は牛飼いから真実を聞き出した。アステュアゲス王はハルパゴスを呼び出し、孫のキュロスが生きて戻ってきたので神様にお礼のお祭りをしたい。ついては汝の息子を王宮に寄こすようにと命じた。王はハルパゴスの子がくると殺して手足をバラバラに切り離し、肉を煮たり焼いたりして料理し宴の始まるのを待った。食事が始まると王とハルパゴス以外の客には羊の肉が出されたが、ハルパゴスにはわが子の頭と手足以外の肉が出された。王はハルパゴスに食事はうまかったかと尋ねた。ハルパゴスが結構な味でしたと答えると従者が籠に入れた子供の頭と手足をもってきて覆いを取り、お好きなものをお召し上がり下さいといった。ハルパゴスは仰天した様子もなく残った肉をもって自宅に帰っていった（1. 107-119）。

この伝説は世界の王朝の始祖にまつわる捨て子説話がもとになっている。あの世である母胎から誕生した赤ん坊をもう一度あの世に戻しさらにこの世に連れ戻すのが捨て子の本来の意味であった。キュロスの場合は、ギリシアのオイディプスと同じように別の家で育てられ、十三歳になって成人に達してから親の許に帰る。キュロスは死児と交換されて生命を得る。養い親は牛や犬に関わる人物である。キュロスが成人に達して王宮に帰ったときハルパゴスの同年の息子を殺して新しい生命を得た。ハルパゴスもメディア語では一切の牛を管掌する者の意である。漢訳仏典『根本説一切有部毘奈耶破僧事』（大正蔵第二十四卷律部三）では宰牛大臣と訳されている。釜や鍋の語は出てこないが、ハルパゴスは牛の管掌者であるのでソロモンの海やウラルトゥの墓室の入口にある釜と同じような牛に関りのある釜で牛の首と脚を煮たのであろう。それが残忍な結末を迎えることになった。

キュロスは最初牛飼いの妻の生んだ死児と交換して育てられたが、今度は殺されたハルパゴスの息子と交換に成人して王家に戻ったのである。この場合、ハルパゴスの息子はキュロスの他我であってキュロスを活性化させるた

## 不思議の鍋

めに殺されその生命をキュロスに移したのである。釜の中に死体を入れると死者が再生するという伝統があることは先述したが、キュロス伝説では儀礼上死んだキュロスはハルパゴスの息子の死体を釜や鍋の中で調理することによって再生すると信じられた。古い儀礼である再生を神に感謝する祭りでは、キュロスをはじめとする王の一族とハルパゴスの一族が客と共に共食したのであろう。

この伝統は先述したように現在でも見られ大釜の中に羊の頭と脚（キャッレ・オ・パーチェ）を煮込むのがそれである。中国から伝わってきた方法と思われるが、罪人を釜ゆでにする刑に用いられる大釜も、本来は神祭りに用いられたものであろう。刑罰と供犠の相関については私は『輪廻の話』（法政大学出版局、1989年）の中で論じたことがある。石川五右衛門が釜ゆでになったことで名のついた五右衛門風呂がそれである。この鉄の大釜の底に踏み敷く丸い板であるさなは人が入浴しないときは浮いて浮き蓋になる。もちろん、さらにその上に蓋がある。さなは尻や足裏が底に触れたときやけどから守る役割を果たす。

千宝『搜神記』巻十一に次のような話がある。楚の干将<sup>かんしょうばくや</sup>莫邪は三年かかって楚王のために雄雌二本の剣を鍛えたのであるが、楚王は遅いので莫邪を殺そうと考えた。莫邪の妻は臨月にあったが自分が王に殺された場合、生まれる子が男であったら彼が成長したときに、家の南の山の石の上に松が生えているが、その後ろに剣があるといって欲しいといい残して雌の剣をもって楚王の許に出かけた。王は片方の剣しかもって来なかったので怒って莫邪を殺してしまった。そのあと息子が生まれたが赤と名付けられた。

赤は成人したとき雄の剣を手に入れ、楚王に仇を報いることばかりを考えていた。楚王は夢の中で眉間の幅が一尺もある眉間尺という子供が莫邪の仇討ちをすると告げられたので、千金の懸賞をかけてその子供を探させた。

赤は難を避けて山の中を歩いていると一人の旅人に出会った。赤が旅人に一部始終を話すと旅人は赤にあなたの首と剣を楚王の許にもって行って仇を討ってあげようといった。そこで赤は直ちに自分の首を刎ね両手で首と剣を

差し出した。

旅人は赤の首を王に差し出して、これは勇者の首なので釜に入れて煮なければならぬといった。王は赤の首を煮たが首は湯の中からはね上ってなかなか煮えなかった。旅人は王に親しく釜に近寄って見ていただくと赤の首は煮えるだろうといった。王が釜に近づくと旅人はすかさず王の首を刎ねたので首は釜の中に落ちた。旅人も自分の首を刎ねたのでその首は釜の中に落ちた。

三つの首はいっしょに煮えたので区別がつかなくなった。そこで湯の中の肉を三つに分けて葬りひとまとめに三王の墓と呼ばれた（竹田晃訳、平凡社、1964年、205-207頁）。

この説話では赤の首は仇敵の首として煮たのではなく勇者の首として煮たという特徴がある。王の首も仇を打たれた人物の首として釜の中で煮られた観があるが必ずしもそうではなく、英雄の首としていっしょに煮られたと考えられる。旅人の首が最後に釜の中に落ちていっしょに煮られる。旅人は王と赤の間に立つ仲介者で、神が姿を旅人にやつして現れ二人の首を釜で煮ると共に自らの首もいっしょに煮るのである。

この説話に残る首の釜ゆでは報復や刑罰の手段ではなかったことは明らかである。中国の鍛冶師が自分たちの鍛えた剣に英雄の首や神の首を供える説話を保持していたと考えられる。溶鉱炉の中に首を投入し炭素やカルシウムなどを混入し金属の強度を手に入れたのであろう。

吉備津社の釜殿の下に埋められた温羅の首は片目であったので鍛冶師によって信仰された鬼神の首であった。鍛冶師は古代では王権と関係をもった集団であった。釜や鍋の説話には塩にまつわるものがある。岩塩がすぐに手に入る土地ではこの種の話は発展しないが、生命の糧である塩を手に入れることを目的とする場合は塩釜の説話が発展したと考えられる。塩釜は生命の塩を出す釜であるが、無尽蔵の食物を出す釜に変わっていった。食物は塩がなければ味付けができないので一体になっていた。釜の中に入れた死体が生き返るといふのは豊穰性と共に生命の塩があったからである。

## 不思議の鍋

橋南谿（1753－1805）は『東西遊記』巻二に宮城の塩釜の紀行を載せている。塩釜は仙台の東北四－五里の地にあり遊女もいて仙台の人の遊興の場所である。塩竈明神の宮居は廣大美麗で去年京都を出て以来見たこともない立派なものである。本社から四－五丁をへて町に出ると釜殿に達する。ここに四つの鉄の釜が並んでいる。どの釜にも塩水が満たしてあり、塩水は赤、青、紫などみな色を異にしている。国に変異があるときは、水の色が変わる。釜の大きさも同一でなく径四尺余、深さ二－三寸あるいは四－五寸で、脚なく把手もない。形は家庭で用いる丸盆のようであるがその厚さは三寸ばかりあり不相応に厚い。釜殿の三－四軒ほど東の町家の裏に牛石といって牛が臥したような石がある。これは明神が塩を焼いたとき、その塩を背中に載せて運んだ牛であったが石に化したものという。釜は上古の旧物で神物といえる。播州の石の宝殿とこの釜は実に奇物である（『東西遊記』1，宗政五十緒校注，平凡社，1974年，35－37頁）。

南谿がいう釜殿は現在は塩釜市街の中心地の本町にあり御釜社と呼ばれる。創建は不明であるが<sup>しおちのおじ</sup>塩土老翁神を祭神とし四個の塩釜を神体とする。塩釜は鉄製で大きさはまちまちであるが、径130センチ、深さ16センチ前後である。毎年7月4日から6日までの三日間、<sup>もしおやき</sup>藻塩焼神事が行われる。4日には小舟で湾外に出てホンダワラを刈り採り社殿に供える。5日には神社の塩釜の水を桶に汲みとり、それを小舟に積んで釜ヶ淵にゆき積んできた水を海に戻し、新しく海水を汲んで帰途につき、その海水で釜を満たす。6日には藻塩焼きが行われ、別の釜に簀をわたしその上にホンダワラを敷き海水をその上に注ぐ。打ち火によって竈に点火し沸騰させて塩を製する。この塩で7月10日に行われる塩竈神社の例大祭に供える神饌が調理される。御釜社には塩釜の水の色が変化することで吉凶を卜占する信仰がある（三崎一夫「塩竈神社」『日本の神々』12，白水社，1984年，85－94頁）。

塩釜の水は7月7日の七夕の前に新しい海水と入れ替える。四つの釜に入れた海水は、時が経過するにつれて変質したり化学変化を起こして微妙に色の変化を生じさせる。7月7日は1月7日の人日の六か月あとで、死から再

生する日であった。1月7日も7月7日も生命の水と深い関係のある日であったので七夕の前に死の水を生命の水ととり替えるのはそのためであった。奈良東大寺の二月堂のお水取りでは、春分を迎える前に生命の水を闕伽井から汲み、去年汲んだ古い水は使い切ってしまう。キリスト教徒が日曜に祝われる復活祭の前日の土曜の夜に教会にいて井戸水をもらって帰り、自分たち家族に手先につけた水をまいたり壁やベッドの脚に水をふりかけるのも一年の変わり目に生命の水を必要とするからである。

塩釜にも牛の石像が付随する。西アジアの古代文明から中国の牛鼎にいたる表象が塩釜にも見られる。吉備津の釜は牛の鳴き声を出し、塩水とも関係がある。釜は吉備津では牛の鳴き声を出さなければ凶、出せば吉とされた。方法は異なるがト占に用いられた。ト占は神の声を聞くことであったので釜があこの世の声を伝えることについては人々は何の異も唱えなかった。釜は境界性の強いもので、先述したようにあこの世としての墓室の入口にある。

七夕には瓜<sup>ウリ</sup>を山のように積んでお供えする風習があった。ウリは母胎になぞらえるもので中に羊水がつまり、それを切ることによって祖先がまた生まれ変わってこの世に出てくるという信仰があった。7月15日の祖霊祭りは七夕の行事と関係があった。供物として積み上げられたウリの一つ一つの中には一人一人の祖先の靈魂が入っていた。ウリを縦に切れればよいが横に切ってはいけない、あるいはその逆であったりする禁忌があり、それを犯したために中から水が溢れ出て大洪水になったという説話がある。天の川（天漢）がこのために増水し、そのために両岸の男女の逢う瀬が失われたという話が発生した。1月6日あるいは7日と7月7日は井戸や水路や池を浚える日であった。女子の場合、小正月や盆を迎えるために髪の毛を洗って化粧する日でもあった。イランのような乾燥国では、山麓で噴出する多量の水を地下水道カナートで数キロ〜数十キロ先の村に送る技術が発達している。10-11世紀のイランの学者アル・ビールニーの『古代諸民族の暦法』（ザハウ訳、フランクフルト、1969年〈ロンドン、1879年〉）によると1月6日にカナートの泥浚えをした（202頁）。

## 不思議の鍋

安徽省の太湖で五百人の兵士が湖の堰を切ろうとし、湖の神に酒肉を供え池浚えの許可を求めた。その夜一人の人が部隊長の夢に現れて、湖の水はすぐに干上がらせよう。しかしその跡に大魚を見かけても殺してはならない。銅の釜があっても決して開いてはならないといった。翌朝行って見ると水は干上がり一匹の変った形の白い魚を見つけた。兵士の中の一人がその魚を割いて見ると前日神に供えた供物の残りが腸の中に残っていた。少したって釜を見つけたので開いたところ急に水が溢れ出して兵士たちは水に溺れて死んでしまい、隊長だけが命拾いをしてことの次第を語った（劉敬叔『異苑』「湖神の祟り」高橋稔訳、『幽明録・遊仙窟』前野直彬、尾上兼英他訳、平凡社、1965年、121頁）。銅の釜はもと地上にあったものであろう。何らかの理由で釜が淵ともいえる湖に投じられたと考えられる。地上にあっては無尽蔵の食物を出したであろう。それが水中に入ってからは無尽蔵の水を出すようになったのであろう。それはウリを切る禁忌を犯したために洪水になった話と同じように釜の蓋を開けるなという禁忌を犯したために水が溢れ出て五百人が溺れ死んだのであった。

中国の説話は雨乞いのために池の水を人為的に干した行為にもとづいたものである。肥前の領内に<sup>たひら</sup>田平という所がありそこに釜が淵がある。深くて水が枯れることがない。旱魃になると農民たちが集まり力を尽くして水を汲み出す。減ずること半ばに及ぶと水中にわずかに石頭を見る。里人たちは地蔵の頭だといひ伝えている。この石頭が少し現れるときは、雨が沛然としてやってくる。田平の釜が淵での旱魃のときの水干しの行為を見た者の話によると、近辺の農夫、里人が集まり各自が手に桶をもって、鼓を打ち勢いをつける。淵の水を汲んでも水が減ることもなく、かえって桶を傷める者が多い。傍に桶屋を置いて修理しても水勢に勝つことはできない。夕方になって人力つきはて中止した。その後どうなったか知らないという（松浦静山『甲子夜話』2、中村幸彦、中野三敏校訂、平凡社、84-85頁）。釜が淵の底にはこの伝説ではもう釜は見られない。あると信じられているのは石地蔵の頭である。池を干上がらせて大雨によって池を満たし同時に旱魃を終わらせようとする

のである。名称は釜が淵といわれるがこれが古い。ケンペル、前掲書もいうように盗人が釜を盗んで淵に投げ込んだというのが釜が淵の本来の姿であった。

不思議な鍋や釜は調理した食物を無尽蔵に出し洪水を起こすほどの無尽蔵の水を噴き出した。

山東省の東南に位置するかつての琅邪<sup>ろうや</sup>の地において明の時代にある農民が一つの釜を掘り出した。この釜は冷水を中に注ぐと忽ち沸騰し、これで飯を炊くことができた。釜の底には諸葛行窩の字があった。里人らは釜の中に宝物が隠されているのではないかと思い釜を砕いたところ釜は二層になっており中に水火の二字があった。それは焚かないのに飯が炊ける赤土のこしきであったり、水を汲み入れないのにいつも満杯になっている玉製の容器に類するものである（張鼎思『琅邪代醉編』卷二十三，十九）。琅邪は諸葛孔明の出身地であるので神秘的な威力を釜の中に見た。燃料なしに飯が炊けたということであろう。ここでは無尽蔵の食物を出すとはいっていないが、火と水とは無尽蔵であった。

この種の不思議の鍋釜には因果応報の話が付加される。<sup>あがり</sup>東長者は<sup>おおや</sup>大家で<sup>いり</sup>西長者は年とった爺さん婆さんの二人ぐらしで子供も金もない貧乏人だった。ある師走の29日、神さまが乞食坊主に身をやつして東長者の家に行って宿を請うた。長者は乞食を追い返した。乞食坊主は西長者の家を訪ね宿を請うた。爺さん婆さんは坊さんを迎え入れた。坊主は二人に一升鍋を洗って青菜三葉入れ水を一ぱいにして炊きなさいといった。いわれた通りにすると一ぱいの肴ができた。さらに坊さんは釜を洗えといい米を三つ釜の中に入れて炊くと釜いっぱいのご飯ができた。三人はこれを食べて楽しい年忘れをした。坊さんは大鍋にお湯を立てさせ財布の中から黄色い粉をとり出してそれを湯に振りかけた。爺さん婆さんが一度に入ると二人とも十七八の若者にもどった（関敬吾編『こぶとり爺さん・かちかち山』——日本の昔ばなし（1）、岩波文庫、1956年、76-78頁）。

この話では無尽蔵に食物を出す鍋の他に若返りの釜が出てくる。死体を釜



## 不思議の鍋

の中に入れると死者がよみがえる話があるが、老人が若者になることとそれほどの懸隔はない。乞食坊主は大歳の来訪者で鍋や釜がこのような節目に出現することは先述した。境界性のある鍋釜から出る無尽蔵の食物は生命の食物であの世で食べるとあの世で永遠の生命を手に入れ、この世で食べるとこの世で永遠の生命を手に入れる。ここにはまだよもつへぐい（黄泉つ竈食い）の禁忌は発達していない。あの世とこの世の食物にはまだ互換性がある。

高句麗の大武神王4年（21）王は軍を率いて扶余を討とうと沸流水のほとりに着いた。見ると一人の女が鼎を両手で持ち上げて遊んでいるようなのでそこへ行って見ると鼎だけが残っていた。人にその鼎を炊かせてみると火をつけなくてもひとりで熱くなるので飯を炊いて一軍を十分に食べさせることができた。そのとき一人の壮夫が現れ、その鼎はわが家のものであるが、妹がなくし今は王が所有しているといい、この鼎を背負って従軍したいと申し出た。そこで負鼎氏という姓を賜わった（金富軾『三国史記』上、金思燁訳、六興出版、1980年、299-300頁）。

大武神王が水中から手に入れたのは無尽蔵の食物を出す鼎であった。それは鍋釜と同類のものであった。それは釜が淵から手に入れた釜と同じものである。新しいモチーフとしてここで見られるのは一人の女がこの鼎を持っていることである。女は川の神の娘で壮夫はその兄である。鼎は王権を象徴する神器で王に現れるまでは水中にあるものとされた。それが川辺に現れて王の所有物となった。モーソフの日記に見られた江ノ島海岸で炊かれた盆釜に相当するものである。

中国最初の文化英雄である黄帝は衣食住をはじめとして音楽、医薬などあらゆる文明・文化の創始者とされる。黄帝は蚩尤との戦いに勝ったあと首山の銅を採掘して荆山の麓に運ばせ鼎を鑄造させた。鼎は高さが1丈3尺あり穀物が10石入る大きな壺よりもさらに大きかった（袁珂『中国の神話伝説』上、鈴木博訳、青土社、1993年、234-244頁）。荆山の麓には揚子江が流れており、この同じ場所で夏の国の始祖である禹が王子になったとき九つの巨大な鼎を鑄造した。鼎は王子から離れたときは深淵に戻り（一説では禹の九

鼎は泗川に沈み、これをとれば帝王となるといわれた)、新しい王子が即位したとき川岸や湖岸に出現した。そこで鑄造したとあるのもそこに出現したというのも同じである。黄帝が鼎鬚で竜に乗って天に昇ったという伝説がある。鼎鬚を鼎湖と書いてある古書があるが、これでは意味が通じないと袁珂はいう(前掲書, 240, 243頁)。しかし鼎湖がより古い名称である。

古代イランの王にはフルナフ(クッルナフ)という王権が三種付随していた。王が適性を欠き始めるとフルナフは王の身体から去り他の王や英雄に移動していった。始原の王であるイマ王(インド神話では終末の王ヤマ王, 仏教では死者の王ヤマ王, 閻魔大王)が混沌状態におちいり嘘言を吐き始めると、フルナフが三度にわたって王から去ってゆき、それぞれ別の英雄がそれを捉える。このフルナフは所有者がいないときはウォルカシャ湖の湖底にあった。ゾロアスター教の伝承ではこのフルナフはイラン人だけが王権の象徴として所有することができた。非イラン人の王フランラスヤンは三度にわたり湖中に入りフルナフを求めたが、三度ともフルナフは彼から逃げ彼はそれを手に入れることができなかった(岡田明憲『ゾロアスター教』平河出版社, 1982年, 317頁以下「ザム・ヤシュト」31以下, 46以下, 56以下)。

フルナフは学界では光輪, 栄光などと訳され王権を象徴すると解説する。この語は「輝く」から派生したとする。しかしこの語を「食う」から派生したと考えるとフルナフは聖なる食物の意味となる。それを調理するのは無尽蔵の食物を出す鍋である。日本の王権交替の儀礼は大嘗祭であるがこのとき新しい天皇が神にすすめ自らもとる(嘗める)食物と酒はこの種の鍋で調理されるのである。中国の史書に<sup>さんおう</sup>金甌無欠という語があり王権が確固とした状態を示している。甌とは釜のような容器でアーサー大王の神器と同じものを極東の帝王も承継いでいたと考えられる。

ギリシアのデルフォイには自然の大地の裂け目があり、そこから噴き出すガスを吸った山羊や人間は異様な気分を味わった。この裂け目の上に青銅製の三脚に載った巨大な鍋が据えられ、その上に巫女が座って神託を述べた

## 不思議の鍋

『デルフォイの神域』世界の聖域3，講談社，1981年，31，54，58頁）。高句麗の大武神王が河岸で一人の女が鼎を持ち上げているのを見たが，その女は河伯（川の神）の娘であると考えられるが同時に河伯を祭る巫女であった。大武神王は王となるべき神託をえたのであった。古代ギリシアのアテネには現在その名が冠せられている場所とは異なった場所に三つ足鼎トリポデス通りがあった。その名前の由来は通りに面する社殿の屋上に軒並み青銅の三つ足鼎が据えてあるためである。これらの鼎は演劇上演のための諸費用を負担した合唱隊奉仕者が，演劇の優勝を記念して高々と掲げたものであった（パウサニアス『ギリシア案内記』上，岩波文庫，1991年，92，236-237，239頁）。ギリシアの場合は王権の象徴というよりは，この世とあの世の間で演じられる演劇の優勝者が手に入れた。一見競技の賞品のように思われる。優勝者は鼎あるいは大型杯にブドウ酒を盛り祝賀の宴で神人共飲したであろう。

玄奘（602-664）はインド歴訪の途次，北インドの戒日王（在位606-647）を訪問したことを自らの『大唐西域記』で述べている（水谷真成訳，平凡社，1971年，163-168頁）。仏教国では五年に一度国庫を傾けて群衆に施しをする習慣があった。武器のほか飲食，衣服，臥具，湯薬を二十一日にわたって諸国の沙門に供養した。雨期の三か月間は日々珍しいご馳走をつくり異学の人々に振る舞った。戒日王は数十万の群衆を従えてガンジス川の南岸に位置し拘摩羅王クマラは数万の群衆を従えて北岸に位置した。このとき諸国の二十余王は命令を奉じてそれぞれ自国の傑出した沙門や婆羅門，役人，兵士と共に参集してきていた。戒日王は二十一日の間珍しいご馳走を沙門や婆羅門に供した。これらの食物を調理するには不思議な鍋釜があったと昔の人は考えたに違いない。

『大唐西域記』にはないが『今昔物語集』巻第六 玄奘三蔵渡天竺伝法帰来語第六に次のような話がある。玄奘は天竺に渡り法を伝受して帰国する途次あちこちの仏跡や名利に詣でたが，戒日王は法師に帰依して様ざまな財物を与えた。その中に一つの鍋があった。それは無尽蔵の食物を出す鍋で，その食物を食べた人は病気にならないという。鍋は伝世の国宝であったが，王

は玄奘の徳行を貴んで下賜した。法師はこの鍋をもってインダス川を渡ったとき、船が傾いて多くの経文が今にも海に沈みそうになった。法師は大願を立て祈ったが何の効果もなかった。法師が、船が傾くのは何かわけがあるのだろう。もしこの船に龍王が欲しがらるものがあるならそれを示して欲しいといったところ、川の中から<sup>おきな</sup>翁が現れて鍋を請うた。法師は多くの経文を失うよりはこの鍋を与えようと思い川の中に鍋を投げ入れた。かくて玄奘三蔵法師は無事にインダス川を渡ることができた。

この説話の中のモチーフはそれぞれ上来論じてきたものである。龍王が翁に化現するモチーフは初出である。塩釜の伝説に塩土老翁神が祭神とされるがこれと関係があると考えられる。山幸彦が兄の海幸彦の釣り針を魚にとられ困惑していると、海岸に塩土老翁が現れ山幸彦をまなしかたまの小舟に入れて龍宮に送った。この塩土老翁も龍宮の龍王の化身であった。解説者が分析するような新しいものではないと思う。鍋は異国の玄奘の手には入らないで本来の釜が淵あるいは龍が淵あるいは鐘が淵に帰っていったのである。

孫文が異国の貴公子に与えた鍋は東シナ海の龍王の許に帰ることなく平安に日本に招来された。

## The Miraculous Pot

Eiichi IMOTO

Sun Yat-sen, Chinese revolutionary, gave a miraculous pot to Tatsukichiro Horikawa, Japanese nobleman, when he departed from China for Japan after the completion of the revolution.

When one rubbes the handles of the pot with water in up to 70 per cent height, a large quantity of mist gushes forth. The pot is kind of the *cornu copia* which supplies inexhausted food and drink. This kind of pot was considered not as a pot of this world but as that of the world beyond.

Loaves and fish of Jesus (Matt. 14. 13—21) were cooked in this pot. The large bronze 'sea' in front of Solomon's temple and the Holy Grail of King Arthur were of the same origin.

A miraculous pot belonged to the god of the underwater or the underground world so it was laid out at the entrance of the cave tomb.

Ancient blacksmiths needed carbon in melting metals. They sacrificed a human being and put it into the melting pot. The story of the miraculous pot is often connected with the body or the head of the victim.

The kingship was represented by the miraculous pot. When the kingship was lost the pot sinked to the depth of the water and was guarded by a dragon god, and anyone who got it out of the water became a new king.